福井県立美術館 2017

美術館だより

MUSEUM NEWS Vol.154

contents

〈展覧会紹介〉狩野芳崖と四天王展 [2～3]
〈展覧会紹介〉県立美術館名品200選 第4部 日本画への挑戦　破壊と創造 [4]
〈イベント報告〉座談会　岩永勝彦を語る [5]
県立美術館名品200選展
蔵出し講演会記録「横山操と私」加山又造（後編） [6～7]
福井県立美術館友の会「平成29年度　春の見学会」 [8]
それゆけ！ブブ広報部隊　其の九
次回展覧会のお知らせ
お知らせ・貸館情報

表紙：岡倉秋水「不動明王」（部分）

福井県立美術館開館
40周年特別企画展

狩野芳崖と四天王

―近代日本画もうひとつの水脈―

9／15金▼10／22日

狩野芳崖「伏龍羅漢図」（部分）
福井県立美術館

〝近代日本画の父〟と称される狩野芳崖の下には4人の高弟がいました。岡倉秋水、岡不崩、高屋肖哲、本多天城の4人です。彼らは芳崖の最晩年に師事し、また芳崖の絶筆「悲母観音図」の制作を間近で目撃しています。そんな彼らは開校間もない東京美術学校において、同期生たちから「芳崖四天王」と称され、一目置かれる存在であったと伝えられています。

本展は「芳崖四天王」に注目した初めての展覧会です。多数の新出作品から、知られざる四天王の人と画業を紹介します。また師・芳崖を中心に、狩野派の最後を飾る画家たちの作品や、四天王と同じ時代を生き、岡倉覚三（天心）と共に日本画の革新に挑んだ横山大観、下村観山、菱田春草ら日本美術院の作品が一堂に会します。

芳崖の創った多様な近代日本画の水脈を辿り、その魅力あふれる作品をご覧いただきます。

休館日◉9月19日(火)、25日(月)、10月2日(月)、10日(火)、16日(月)
開館時間◉午前9時から午後5時(入館は閉館30分前まで)
※9月15日(金)のみ午前11時開館。※会期中展示替えがあります。
観覧料◉一般・大学生1000円(団体800円)、
リピーター券1500円、高校生以下無料
※団体は20名以上。※障害者手帳等をお持ちの方とその介助者1名半額。
主催◉福井県立美術館、読売新聞社、美術館連絡協議会
共催◉FBC福井放送
協賛◉ライオン、大日本印刷、損保ジャパン日本興亜
協力◉日本通運

【重要文化財】
狩野芳崖「不動明王」（部分）
東京藝術大学

師・狩野芳崖とその弟子「芳崖四天王」の作品を一堂に

【重要文化財】狩野芳崖「悲母観音 下図」東京藝術大学
10月3日～22日

天心の甥、そして芳崖顕彰における最大功労者
岡倉秋水
おかくらしゅうすい（1867～1950）

福井県福井市の生まれ。天心の六歳年下の甥。明治一七年ころから芳崖に師事。芳崖没後、東京美術学校に第一期生として入学するが、翌年図画教育に従事するために退学。明治二九年より学習院で教える。明治三四年に小林呉嶠らと日月会を創立し、中心画家として活躍した。歴史人物画に秀作を残し、昭和二五年、八三歳で没。

岡倉秋水「矢面」福井県立美術館

本草学研究を志した学者画家
岡不崩
おかふほう（1869～1940）

福井県大野市に藩士の子として生まれる。はじめ友信の門に入るが、友信の紹介により芳崖の門を叩く。明治二二年に東京美術学校に入学するが、二年次に退学し図画教育に従事する。鷹田其石と共に真美会の理事を担うが、後半生は本草学に傾倒し、数多くの著作を残す。また草花図を得意とした。昭和一五年、七一歳で没。

岡不崩「群蝶図」個人蔵
10月3日～22日

〝仏画師〟を自称した異才
高屋肖哲
たかやしょうてつ（1866～1945）

岐阜県大垣市に士族の子として生まれる。明治一九年芳崖に師事。東京美術学校に入学し、第一回生として卒業するが、自ら「仏画師」と称し、高野山で参籠、各地の寺院を訪ね歩くなど、仏教美術研究に従事する。この間、膨大な量の忘備録を残す。また仏画の新按に挑戦し、精神性の高い作画を行った。晩年は市井画家として活躍した。

高屋肖哲「千児観音図下絵」金沢美術工芸大学

芳崖門下の秀才
本多天城
ほんだてんじょう（1867～1946）

関宿藩士の子として、江戸深川の藩邸に生まれる。幼少より絵や彫り物に親しみ、はじめ近澤勝美に就いて洋画を学ぶが、明治一八年に芳崖へ入門。芳崖没後は東京美術学校に入学し、卒業後は同校で助教授を務める。また丹青会の発起人として運営に関わる。山水画を得意とし、多くの優品を残したが、昭和二一年に没。

本多天城「山水」川越市立美術館蔵
10月3～22日

《関連イベント》

◆手塚雄二特別館長ギャラリートーク
（要観覧券・申込不要）
9月15日㈮
午後1時45分から（2階会場にて）

◆記念講演会「近代日本画と西洋絵画」
（聴講無料・申込不要）
9月23日㈯ 午後2時から（講堂にて）
講師／三浦篤氏（東京大学教授）

◆特別対談「芳崖四天王コトハジメ」
（聴講無料・申込不要）
10月14日㈯ 午後2時から（講堂にて）
登壇者／塩谷純氏（東京文化財研究所文化財情報資料部 近・現代視覚芸術研究室長）
×椎野晃史（当館学芸員）

◆トークサロン「展覧会ができるまで」
（要事前申込・ドリンク代別途必要）
10月1日㈰、15日㈰
各回午後5時から
（美術館喫茶室ニホにて）
本展を担当した学芸員が、展覧会の苦労話や裏話をお話します。
※申込は当館HPをご確認下さい。

IV 日本画への挑戦 破壊と創造

平成29年
9.15金▶10.22日

開館40周年記念特別企画展
県立美術館名品200選
～コレクションが魅せる日本美術の400年 伝統・革新・発展～

40TH ANNIVERSARY

［休 館 日］ 9/19・25、10/2・10・16
［開館時間］ 午前9時から午後5時（入館は午後4時30分まで）
［観 覧 料］ 一般・大学生 500円、ワンコイン・パスポート（期間中何度でも観覧可）、高校生以下無料
※20名以上の団体は2割引き　※障害者手帳等をお持ちの方とその介助者1名半額
［主　　催］ 福井県立美術館
［共　　催］ 福井新聞社、福井放送

戦後日本画の風雲児 ― 横山操

開館40年周年を記念し、7月から始まった「県立美術館名品200選」展は、選りすぐりの当館コレクションと特別出品作品による四部構成で、400年にわたる日本美術の流れを辿るものである。9月から開催の「Ⅳ 日本画への挑戦 破壊と創造」は、社会的にも激動の時代であった戦後の日本画作品を紹介する。

戦後、日本画壇では非近代性や古い体質を批判した「日本画滅亡論」が巻き起こった。若い作家たちは危機感をつのらせて既存の日本画に戦いを挑み、逆境の日本画は才能ある作家の台頭で新風が吹き込まれ、むしろ活況を呈していった。そのうちの1人、横山操（1920−1973）はシベリア抑留から復員後、現代社会に題材をとった桁はずれの大作で注目を集め、「日本画の風雲児」と称される。後には装飾性と精神性への深まりを見せ、晩年には詩情あふれる繊細な水墨表現を追求した。小倉遊亀（1895−2000）は、1932年（昭和7）に女性として初めて日本美術院同人に推挙され、モダンな造形や、対象すべてに仏を見出す温かみのある眼差しで描かれた作品で独自の境地を切り開いた。

本展では横山操のご遺族の所蔵作や、小倉遊亀の出身地の美術館である滋賀県立近代美術館のコレクションを交えて、破壊と創造の新陳代謝を繰り返す日本画の挑戦を振り返る。

スペシャル・プログラム

◆対談「横山操先生と私」 聴講無料・申込不要
［日　時］9月16日(土) 午後2時～3時30分
［登壇者］米谷清和氏（多摩美術大学教授）
［聞き手］佐々木美帆（当館学芸員）

◆トークサロン「米谷氏と語る横山操」 要事前申込・ドリンク代別途必要
［日　時］9月16日(土) 午後5時30～6時30分
［ゲスト］米谷清和氏（多摩美術大学教授）
［聞き手］西村直樹、佐々木美帆（当館学芸員）
［申込先］福井県文化振興課　0776-20-0580
美術館喫茶室ニホ　0776-43-0310

横山操《網》当館蔵

横山操《川》当館蔵

小倉遊亀《姉妹》滋賀県立近代美術館蔵

《イベント報告》企画展「岩永勝彦の世界」関連イベント

座談会 岩永勝彦を語る

[日　　時] 平成29年6月18日(日) 午後2時～
[場　　所] 福井県立美術館講堂
[登 壇 者] 佐川文子氏(洋画家)、岩永純氏(画家)、西村直樹(当館主任学芸員)
[参加人数] 約100名

県立美術館では6月18日(日)に、企画展「岩永勝彦の世界」の関連イベント「座談会『岩永勝彦を語る』」を開催しました。

座談会では、岩永氏の初期から最晩年までの作風の変遷を画像で紹介。アンフォルメル・アートや抽象画から一転して、福井や関西の忘れ去られた風物や場末の人間模様を独自の視点と独特の色彩で描くようになった経緯等について掘り下げました。また他界する数年前から創作への思い等を自ら綴った手記やスケッチブック等も公開。岩永氏の全体像を多角的に検証しました。

2時間近い長丁場を時に真剣に時に笑いを交えつつお話しいただいた佐川文子さん、岩永純さん、ご来場いただいた皆様にこの場を借りて、お礼申し上げます。

右から、佐川文子、岩永純、西村直樹

《イベント報告》

～コレクションが魅せる日本美術の400年 伝統・革新・発展～

開館40周年記念特別企画展 県立美術館名品200選

◉FFAM7結成

開館40周年を記念して当館PR応援隊(略称:FFAM7)が結成されました。7月1日に登録式が行われ、メンバー 7人は当館の情報発信を担っていきます。

◉美術館の舞台裏ツアー &絵巻日記を描こう

絵巻に美術館探検絵日記を描きました！

[日　　時] 7月22日(土)
午後2時～4時
[参加人数] 16人
[講　　師] 佐々木美帆
(当館学芸員)

◉クリ・ヨウジ アニメーション一挙上映！

[日　　時] 8月5日(土) 午後3時～4時
[参加人数] 20人

今年、第46回日本漫画家協会賞大賞を受賞した鯖江出身のアニメーション作家であるクリ・ヨウジ氏の、昭和30～40年代の頃の館蔵作品を特集・上映しました。

◉アニメや映画の原理が分かる？！
～回転のぞき絵(ゾートロープ)をつくろう～

[日　　時] 8月12日(土)、14日(月)
各日 午前10時～
午後1時～
[参加人数] 54人
[講　　師] 内藤秀信氏
(ペーパークラフトモデラー、ごじら工房主宰)

皆、満足のゆく作品ができました！

◉短編人形アニメーション上映会

[日　　時] 8月11日(金・祝)、13日(日)、14日(月)
各回 午前11時～12時、午後1時～2時

◉大人のためのアートなお盆休み～お盆は浴衣でGo!～

[日　　時] 8月11日(金・祝)～15日(火)

美術館に足を運んでもらう趣旨で、お盆に浴衣で来館の方は入場無料、また浴衣&着付けの無料サービスを実施しました。期間中、家族連れやカップルなど約230人の方が浴衣で入場いただきました。

後編

福井県立美術館 蔵出し講演会記録

「横山操と私」加山又造

昭和55年9月7日(日)　於当館講堂　参加人数200名
「回顧 横山操」展(9月6日～9月28日)
音源デジタルデータ化協力：福井県立美術館ボランティアの会
音声書き起し・編集・注釈：佐々木美帆(当館学芸員)

復員後の活動

戦前の日本画は官展中心主義で、日展はご存知でも「日本美術院はよく知らないよ」、「青龍社は全く知らないよ」、「創画会なんて聞いたこともない」という、一つの権威を日展の日本画は持っているわけですね。その状況が戦前は強かった。けれども日本画を始めようと横山操が思ったとき、権威を否定して、新しいものを自分の手で作る可能性のある場所、青龍社を選んで身を置こうとした10代の青年の考えは、非常に興味があるところです。私自身もそういうところがあって、当時出来た創造美術に属しましたけど、そのへんから後年の横山操があるように思うんです。

戦争中の大東亜共栄圏の盟主国っていう大変大げさな境状的なことで、絵を含め、あらゆることが出発して、それが終戦と同時に三等国、いや五等国ぐらい、一番最低の意識まで一遍叩きつけられた。それじゃあ日本美術は、日本文化は、我々はどこへ、一体何をして、どう行くのが日本の本来のあり方か、というのを非常に考えさせられた。僕自身もそうなんですけれども、つまりそれが生きる道ですから、出発点で個人的な感情の余地があまりなかった。

絵描きは個人の才能、個人の考え、個人の自由ですけれども、私どもの世代はそれだけじゃあ、いつも済まない。物質的に非常に恵まれているのだけど、飢餓感というか、使命感なんかがなきゃいけない。それで今の考え方、民主主義、自由主義っていうのは最後の本位置じゃない。かといって全体主義的な境状、全体主義的な酷さというのも痛い程知っている。それじゃ、一体どういうことかというと、結局自分の一番使い易い、やり易い表現方法で何かを知らせたり見つけたりしよう。それが結局、横山さんにとっては絵だったんでしょうね。

1963年、アトリエにて

大変な精神力と体力で帰ってきて、当時から驚くべきスピードで作品ごとに注目を集めていくわけです。《川》とか《網》、これが発表されたときは大変衝撃的でした(註1)。銀座の松坂屋っていうデパートで、始めに使える可能な壁面を測ってきましてね。それに合うパネルを作って絵を描いたんです。ですから会場に入った瞬間は絵だけしか見えないんですね。床と天井、壁は全部絵で埋まった訳ですから。実にすごい臨場感というか、迫力がありましたですね。

それまでの日本画は非常に草食化されたもの、いわゆる綺麗に見える形に作り替えられたものであったから、横山さんの臨場感っていうかな、その場に立たされてるって感じが衝撃的であると同時にアカデミックな目から見ると異常に乱暴に、奇異に見えたものです。だから現在受けている評価とおよそ違った非常に酷い評価を受けて、あんなのは絵じゃないなんて言われた向きもありました。

けれど確実に僕らを含めた若い世代、それ以下の世代の気持ちを掴んでいったことは確かみたいですね。それを契機とし、青龍社が会場芸術を唱えていることもあって、常識はずれの大作をどんどん描いていくんですけど、それを自由にこなす体力と才能は十分に持っていました。

あれだけの大作を描くのに時間と費用がものすごくかかるんです。横山操は大変な才能を持っていまして、当時デザイン会社でアルバイトをやるんですけど、銀座のど真ん中に当時出始めたネオン塔のでかいのを作りまして、それが成功してアトリエを提供されたとか、色んなエピソードがあります(註2)。始めから絵以外のことは考えないで、昼間デザインの仕事でお金を一所懸命作って、そのお金を絵具、パネルに全部つぎ込んで、絵のために生きていた。そして残ってゆく作品が、今会場でご覧になるような日本画にとって革命的といえる非常に立派なものになるんです。30代のはじめで、それだけの気持ちを持って、それだけの作品を信じてやり遂げたっていうのは大変なことだと思います。

横山操と加山又造の出会い

横山さんは二重性がありましてね。異常に細かい神経と、それとまったく逆で豪放磊落って感じとその２つが同居した、実に不思議なタイプの人でした。神経質になりだすと小さな子どもより、なお臆病になるくらい細かいし、でかくなると大学の紛争で大勢の学生を前に一歩も引かない凄い迫力を持っていました。とにかく不思議な魅力的ないい男だったですね。

横山さんは「情熱と行動」っていう言葉が好きでね。自分の部屋にあの筆使いで、その２つの言葉を大書して壁に貼っていました。それと同時に、やはりこれは自分の人生体験から出たことでしょうけども、額に汗して働いている人がすぐ分かる絵が描きたいということをとにかく貫き通したと思います。

出会ったのはちょうどその頃で、何かに書いたことがあるんですけど、銀座の個展会場に横山さんが来てくださったんです。それまでに横山さんの《網》と《川》が出た展覧会に参ったときはお会い出来なくて、私の小品展の個展のとき芳名録に横山さんの名前があったんですけどお会い出来なくて。美術雑誌とか日刊紙の学芸欄、文化欄とかに色々話が出ていたものですから僕も横山さんも互いの仕事を知っていました。

当時横山さんが35歳か６歳、僕が30代のはじめか、20代の終わりだと思います。《炎炎桜島》の翌年、昭和32年に東京画廊でわりあい大きな個展を僕がやりました。ちょうど展覧会の２日目、横山さんらしい人が来てお連れの人と絵を見て色々と話しているんですね。

ちょうど「こんにちは」って言おうとしたときに「どうもそのこの絵はあんまり気に食わない。あんまり良くないじゃないか、なんだこんなもの」って言ってるんですね。そこで僕がひょいと出たものですから、向こうもすぐ分かったらしくてばつが悪い訳ですね。こっちも一所懸命描いたものですから「なんだこんちきしょう」と思うところがあったのかもしれませんけど、あっちは大きいですしね。当時とっくりのセーター着まして、ゴム長履いて、すごいんですよ、長髪でね。

今だったら多少大人だからうまく繕って挨拶するんでしょうけど、睨み合っちゃう訳ですよね。こっちはあんまり体力ないから、ぶん殴られたら一発でふっとんじゃうので、ぶん殴っても届かない安全距離から睨み合ったっていうのが最初の出会いで、それが非常に印象深かったですね。横山さんもそう思ったらしいんですけど。

経緯を見ていた親切な人がそれから一週間ほどして「あれじゃあまずいよ。飯でも一緒に食ったら」ってご自分の家ですき焼きパーティーをしてくださって、初めて会ってご挨拶したんです。その時はとっくりセーターは着てなくて、ぎゅっとした背広を着ましてね、散髪に行ったのか髪の毛もそんなに長くなくてね。こっちもきちんとして行きましたから。

それでお話して、十年の知己に近いつき合いが始まる訳です。いろんな事を教わりましたよ。横山さんは非常に悪ぶる所があった人ですけども、その反面非常に礼儀正しくて律儀深くて友達なんかに非常に気を使いました。

僕は頼まれて美術大学へ行き出したんですけど、横山さんとやったら随分面白かろうと横山さんに「大学の先生にならないか」って話をしたんですね。そうすると「だいたい俺は大学が気に食わねえ」っていうわ

けですね。「大学なんてのは人を弱くしても強くするところじゃない」ってなんとか色んな屁理屈つけてましたけどね。

それでも「面白いよ、若い人がいっぱいいて、女子学生なんかいっぱいいて、わいわいやっていて面白いよ、面白いよ」って繰り返していったら「そんなら行ってみようかな」って言ってね。

でも横山操ほど教育者として立派な教育者はなかったのではないかと思います。学生数自体が少なくて、当時日本画１クラスは15人前後。今、私立美術大学は競争率激しくて、１クラス30人前後で当時の面影ないですけど、そういう具合ですから、学生１人１人の情報を家族構成から丹念に集めましてね。学生１人１人のことをよく知っていて、労ったり脅かしたりなんかして、下手くそな学生をうまい絵を描く人に育てていくんですね。まさに神技に近かったけど。

初期の頃の教え子のうちの２人がやはり福井の出の人で、なかなか才能があって横山さんとても目をかけていました。横山さんが新潟の出だったものですから、裏日本の、越後、越前ずっとこの線にある、何ともいえない反発力っていうのでしょうか。カチンとやられていても、いつの間にか立ち直って逆に前より凄くなっているっていう風潮があるんじゃないかって非常に可愛がったですね。もちろん九州の人間も秋田も全部可愛がりましたけどね。

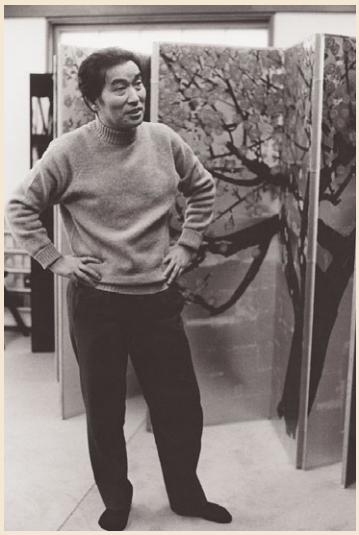
多摩美は東北から北陸の人が多かったようですね。学生の反応っていうのはちょっと時間かかるんですけどね。「口でこうだろって言うと何かぽんとこう、時間が経って返ってくる、それがとてもいいんだ」「ああいうのが凄い絵を描くんだから」って盛んに言っていました。

赤富士と水墨画

富士山っていうのは日本人の気持ちに非常によく合う、つまり日本を象徴する原点がある。当然といえば、当然の話ですけど、横山さんは単にぽかっとしているよりも真っ赤なのがよかろうっていうので。

まあ赤富士っていうのは北斎の富嶽三十六景の有名な表現法であった訳ですけど、それを一つの装飾的な型に作り上げるんですね。それがあの戦後苦しんで働いている人の、ある一種の共感を呼んだっていうことなのでしょうか。いわゆる鑑賞の世界でも大いに共感を呼びまして、ばんばん描いて、横山さん自身は２千点描いたっていうんですけど、まさかそんな数はないので、でも百点ぐらいはあるんでしょうか。とにかく大変評判になった。

同時に《赤富士》なんて俗っぽいものはしょうがないっていう批判が各所から起こるんですけども、ニヤリと笑って黙殺していましたね。それが今どの１点１点を見ても不思議に懐かしい。日本の原点って言ったけど、確かにそういう日本人の心みたいなものを感じて。


1963年頃、「紅梅白梅」屏風の前

最後は水墨になっていくのでちょっと触れておきたいと思います。

僕らの世代だと水墨を描く人は、非常に古い花鳥画の系統では竹内栖鳳、山水では横山大観、色彩が加わって川合玉堂、そのへんで止まってしまった訳ですね。戦後水墨画らしい水墨画がない。特に若い人がやる形は全然なかった。

でも「現在の油絵や世界の絵画に対抗して日本画を位置づけるためには、どうしても水墨を何らかの形でしっかりさせないといけない」と、随分若い時代から言うのですけど、実際始めるのは横山さんの生涯の晩年に入る頃からなんですね。

記念講演会をする加山又造氏

始めは「瀟湘八景」、いわゆる宋元の水墨山水の典型的な例をとってやるんですけど、それは中国なので日本の景色でなければならない。初めは近江八景を見て廻ったらしいけど、「瀟湘八景」に倣って便宜的につけた観光名所は面白くないので、結局故郷へ帰って来て、新潟、越前、越中、越後の山川海、草木というものを一つ全部ひっくるめて一つの典型を作ろうと《越路十景》と題する一連の実験の作品を作った(註3)。

伝説に近い風呂屋の煙突の煤から始まった墨に対する思考を、中国の古墨を丹念に集め始めてそれを試しています。とにかくこの会場に《越路十景》全部持ってきて頂きたいとしみじみ思う位、10点すべてすばらしいものです。そのなかの《越前雨晴》ですか、よくご覧下さい、あれは横山操の晩年の最高の代表作と同時に、戦後の日本画ないしはいわゆる昭和の日本画の新しい灯標になっていっていると言っても過言でない。

横山さんは若いに関わらず40代の後半で、すでに成熟の時代を迎えて、さらに新しい水墨の世界を発展させようっていた時に、長年の病気その他がいっぺんに表面に出てきて、脳血栓で倒れるんですよ。それで右半身不随になりまして、リハビリテーションとかいろんなこと機能回復のため努めるんです。戦争も切り抜けたし、捕虜生活も切り抜けたし、それで右半身不随って言う大変な病苦にも一時切り抜けそうに見えたんですよね。

横山さん「またやるぞ」って言っている最初の発作から２年後、今度は脳出血で３月に倒れて、これはついに切り抜ける事ができなくて、学生たちが沢山見守る中で大変惜しまれながら死んじゃったんです。本当にもったいないですよね。あんなにいいのが死んじゃって。

戦後、30歳で本当の絵描きとして出発して53歳のたった23年間に、他の絵描きの３人分４人分の仕事してきた人だと思うと、力を尽くして皆さんに見てもらいたい。そしてあれを基にして、あの迫力を乗り越えて、日本の文化、日本の美術を作っていって欲しいって気がしますし、僕も横山さんが遺していった大きな宿題を背中に抱えて、横山さんが遺していった教え子たちとともに勉強していっているつもりなんです。

今あの人が生きてたら随分素晴らしい仕事もあったろうし、日本美術、ないしは現代の世界の絵画のなかで随分新しい発見があったろうと思うと本当に残念ですね。絵描きっていうのはどうしても自己中心で、僕の見た狭い範囲の間で、横山さんは大変つき合いの幅の広い人でしたから沢山の各界の知り合いがありますんで、また何かの機会に僕の角度と違った話とか文書が出て来ると思います。そういうのを目に留まった時に、横山操っていうのをもう一度思い出して美術だけに限らず、日本人の中の1人が日本というものについて、いつも考えて、何かを作ろうとしたっていうことも考え頂ければ大変ありがたいんじゃないかと思います。

註１：《網》、《川》は、銀座松坂屋で第1回個展（1956年1月27日～２月1日）に出品される。
註２：1953 ～ 1983年、操デザインの森永製菓の広告塔が飾られる。また、1954年、不二ネオン事務所の2階をアトリエとして借り、大作を制作。
註３：越路十景は、《越前雨晴》を含む10点で構成される。1968年４月、彩壷堂画廊の越路十景展に出品。

福井県立美術館
友の会

〈平成29年度 春の見学会〉

日　時◎平成29年7月6日（木）　参加人数◎42名
行き先◎大一美術館、名古屋ボストン美術館「パリジェンヌ」展
　　愛知県美術館「大エルミタージュ美術館」展

今回の友の会春の旅行は、総勢42人で名古屋の美術館三館を日帰りで巡りました。まず、最初に訪れた美術館が大一美術館。ここは大一商会がメセナ事業の一環として運営している主にガラス工芸品を収蔵する私立美術館で、美術館としては小型ですが、特にエミール・ガレのコレクションは一級品揃いで、実に見ごたえがありました。

昼食後は、名古屋ボストン美術館の「パリジェンヌ」展を訪問しました。この展覧会は、絵画や写真以外に、ドレスや靴などの実物も展示し、約120点の展示品で18世紀から20世紀までのパリジェンヌの魅力を紹介していました。名古屋ボストン美術館は、福井県立美術館友の会の旅行でも何度も訪れていますが、来年度いっぱいでの閉館が決まっており、実に寂しい限りです。

最後に訪れたのが、愛知県立美術館の「大エルミタージュ」展でした。世界最大級のエルミタージュ美術館から、エカテリーナ2世の収集品も含めた名画85点が紹介されていました。この展覧会は、近代美術は入れずに、16世紀から18世紀までのオールドマスターのみで構成しているというのが特徴で、すべて常設展示品というだけあって、実に見ごたえのある展覧会でした。

「パリジェンヌ展」でのドレス展示

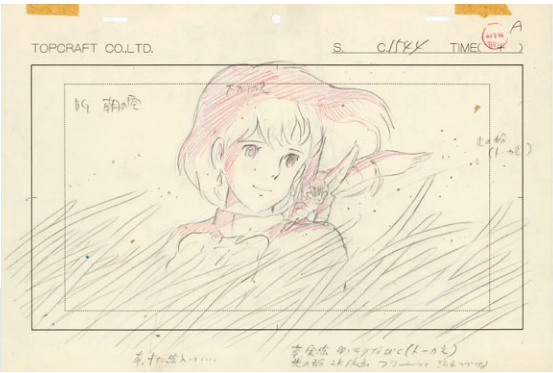
愛知県美術館「大エルミタージュ美術館展」での記念撮影

絵・文　ささきみほ

次回展覧会のお知らせ

開館40周年特別企画展
高畑・宮崎アニメの秘密がわかる。
スタジオジブリ・レイアウト展

会期：平成29年12月8日㈮～平成30年3月11日㈰



「風の谷のナウシカ」©1984 Studio Ghibli・H

お知らせ

◎2017年9月15日～12月の休館日について

展示替え、館内メンテナンス等のため、下記の日程は休館とさせていただきますのでご了承下さい。
9月19日㈫、25日㈪、10月2日㈪、10日㈫、16日㈪、23日㈪～11月1日㈬、8日㈬、15日㈬
20日㈪～12月7日㈭、31日㈰

共催・貸館情報 [2017/11/2~11/19]

11/2～11/14 ● 第68回 福井県総合美術展
11/16～11/19 ● 第28回 福井県高等学校総合文化祭 美術・工芸・書道・写真展
特別支援学校作品展

本誌は再生紙を使用しています。
編 集／発 行：福井県立美術館　〒910-0017 福井市文京3丁目16-1　tel.0776-25-0452　印 刷：河和田屋印刷株式会社　発行日：平成29年9月15日　17.09.20220